

草庵仏教

第210号
(発行日)

2007年12月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan

《 開法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉
毎月22日午後2時

○ 〈念仏座談会〉
毎月2日および12日
午後3時より。

○ 真宗共学会 --- 毎月2日と
12日。午後7時より。

* 8月22日同朋の会および8
月12日念仏座談会は休みます

気分とお念仏

仏教で煩惱という、愚痴と貪欲と瞋恚が代表的なものである。いわゆる愚かさや欲と怒りである。そうなんだが日常生活の実際ではどういこと「煩い悩み」かという、案外「気分」というものように思われる。

日常生活では煩惱はしばしば「いやな気分」として胸に湧いてくるといえるのではなからうか。もちろん、非常に不愉快な言動にあつて腹が立つということがあるが、いつもかつも腹が立っているわけではない。たとえば人間関係の中でも「あの人の態度でいやな思いをした」とか「気分悪いわあ」とか「気分を害した」とか、そういう形で煩惱が盛んに起こるのである。

また、歎異抄の第九章には「いささか所労のこともあれば、死なんざるやらんところぼそくおぼゆることも、煩惱の所為なり」とあるが、ちよつとした病気にでもなると、「ひよつとしたら」など

と心細くなり不安な気分になるという、そういう病気や死にたいする不安で心細い思いや気分ですえ聖人は「煩惱の所為なり」(煩惱のせいである)とはつきり仰っている。

そうすると、頭が痛いとか、膝が痛いとか、腰が痛いというだけで、私たちは「気分がすぐれない」し「気分が悪い」のであるが、日常の煩惱は、そういう形で、あるいはそういう気分に伴つて湧いてくるといえよう。私などは疲労が溜まると、もう気分がすつきりしない。

そうしてみれば、凡夫という者は臨終の一念にいたるまでこうした煩惱が絶えないのであるといわざるをえない。

気分というものは人生生活の全体を色づけているものといつてもいい。身体的な状態から「気分がよい」とか「気分がすぐれない」とかいうし、病気や生計上の心配は「生活不安」や「健康不安」といわれるが、それは「不安な気分」

といつてもいい。さらには、環境から気分が左右されることもしばしばである。寒くなく曇天になるだけでもやうつとうしい気分になるし、騒音にさらされると不快な気分になるし、排気ガスにさらされるとイヤな気分になる。これもいわば煩い悩みといえる。

(もちろん仏教学の概念規定での煩惱はより限定的で厳密なものであるが)

そういう点では、気分が爽快で晴れ晴れしているなんていう日は非常に少ないと思われ。

このように私たちはちよつとしたことで気分がうつろしくなりやすいので、気分転換のために気晴らしが必要となる。そこでさまざまな娯楽や道楽や享楽が非常に盛んなのが現代である。ということが裏を返せば、単純な日常生活そのものだけでは気がめいたり気分が晴れないことが多いのが、凡夫の煩惱生活であるといえよう。

こうした気分の悪い時、いわば気分煩惱の起るとき、娯楽や世間的な気晴らしに向

かうのではなく、まずはお念仏をおすすめしたい。

しかし、お念仏は気分を良くするために称えるのではなく、悪い気分が自分で始末がつかぬゆえである。悪い気分を始末するためではない、始末がつかぬゆえ、称えるのである。

イヤな気分がどうにもならぬゆえ、お上げの南無阿弥陀仏である。気分の悪いままの南無阿弥陀仏である。気分がどうにもならぬゆえの南無阿弥陀仏である。

生活上あるいは宗教上の喜びにしても、足利義山師の「よろこばれぬときは、無理によるこぶにも及ばず、ただ称名して、お助けをまつばかりにすべし」

である。喜びを得ようとして称える念仏ではない。悪い気分を無理に良くしようとして称えるのではない。喜びがなきゆえ、あるいは喜び薄きゆえ南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏である。そうすると、不思議にも時いたつて自ずから仏心大悲が私の心に流れてくださる。有難いことである。

真宗問答(四十一)

二 誓偈に学ぶⅢ

「我、無量劫において、大施主となりて、普くもろもろの貧苦を濟わずは、誓う、正覚を成らじ。」

我、仏道を成るに至りて、名 声十方に超えん。究竟して聞ゆるところなくは、誓う、正覚を成らじ。」

(仏説無量寿経より)

(現代語訳)

(わたしは限りなくいつまでも、大いなる恵みの主となり、力もなく苦しんでいるものを広く救うことができないうちなら、誓って仏にはならない。わたしが仏のさとりを得たとき、その名はすべての世界に超えすぐれ、そのすみずみにまで届かないようなら、誓って仏にはならない)

D 「今回は、我、仏道を成るに至りて、名 声十方に超えん。究竟して聞ゆるところなくは、誓う、正覚を成らじ」について、学びたいと思います。まずこの箇所を聖人は非

常に重要な経説と見ておられます。『教行証文類』の行巻の初めに第十七願の因願を用され、それに続けて

「また言わく、我仏道を成るに至りて名声十方に超えん。究竟して聞こゆるところなくは、誓う、正覚を成らじ」と。

衆のために宝蔵を開きて広く功德の宝を施せん。常に大衆の中にして説法師子吼せん、と。抄要)

を引用しておられます。この文を聖人は第十七願の内容とみられ、第十七願における往相回向の願の意味をここに読み取っておられるようになっています

*

A 「難しいですね。もう少しやさしくお話下さい」

D 「聖人は、『仏説無量寿経』の経説から、法蔵菩薩はご自身が一切衆生を救いたいという願、そしてそれを成就する修行(行)によって南無阿彌陀仏の名号を成就し、それを衆生の浄土往生の正因として

衆生に与える(回向する)べく、南無阿彌陀仏の名号を衆生に聞かせて、ついには衆生に届けようとされています。その思召しをこ

の(我、仏道を成るに至りて、名 声十方に超えん。究竟して聞ゆるところなくは、誓う、正覚を成らじ)の願文の中に聖人は読み取っておられるのではないのでしょうか

A 「衆生を仏にするための因を南無阿彌陀仏に仕上げてくださいました、ということは何度もお聞きしました。それを衆生に与えて万人を救おうとされたのですね。そうすると南無阿彌陀仏という仏因をどのように衆生に与える(回向)かという点が非常に大事になるのですね」

D 「そうなんです。阿彌陀仏は、私どもに代わって、成仏の修行である菩薩行をおさめられ、その功德を南無阿彌陀仏の名号に成就し、これをへ大施主となりて、普くもろもろの貧苦)に与えよう(回向)とされました。そしてどのように南無阿彌陀仏の仏因を与えるかという点で、(我、仏道を成るに至りて、名 声十方に超えん。究竟して聞ゆる

るところなくは、誓う、正覚を成らじ)と誓われているのでありますように」

*

A 「この願文が、私たちに名号として成就した仏因を与えてくださる大悲のすがたが表されていると、聖人は見ておられるのですね。ではどのようにして与えようとされるのですか」

D 「それは、名号を衆生に聞かせることによってです」

A 「どう聞かせるのですか」

D 「まずは第十七願文(因願)に示されているように、諸仏善知識が南無阿彌陀仏を讚歎しお説きになる、その讚歎いわゆるお念仏の説法を聞くことによつて、私どもが南無阿彌陀仏とお念仏を申すようになり、申されるお念仏のいわれを諸仏善知識より聞かせていただいで、本願名号を信受するようになるのです。こうして名号は衆生に信受されて衆生のものとなるのです」

A 「衆生が本願の名号を聞くことによつて、名号が信受され衆生のものとなるのですね」
D 「ええ、そうなのです。ただその場合、(聞く)というのは単に耳に南無阿彌陀仏と

いう念仏の声を聴いているというにとどまりません。耳に南無阿彌陀仏の音が聞こえ、そこに南無阿彌陀仏の心が衆生に聞き届けられるのです。名号の心いわば本願のお心が信心として衆生の心に至り届くのです。それをここで(究竟して聞ゆる)と表現されているのです。(究竟して)というのには聞かせていただきたいという仏心が衆生の心に徹到することを表されていると思います」

A 「すると、名号を聞くことは、名号の心である本願が衆生に届くことなのですね」

D 「ええそうです。ですから聖人は、名号を聞くことは本願を聞くこと、信じることなのだと言せられます。『一念多念文意』に

本願の名号をきくとのたまえるなり。きくというは、本願をききてうたがうところなきを聞というなり。また、きくというは信心をあらわす御のりなり。

と仰せになつています」

*

A 「テキストのご文で(究竟して聞こゆるところなくは、正覚を成らじ)と仰せられるのは、一切衆生に本願の名号

雑記帳

哲学者の池田晶子氏が

「非物質の存在を忘れがちなのはなぜなのか」というと、現代の科学的世界観によるところが非常に大きい。科学的世界観とは端的に言う、宇宙は物質であると捉えるものと考え方です。物質を説明することによって宇宙を知ろうという、これは方法としてはあり得ます。けれども物質だけ追いかけてゆくうちに、どういうわけか非物質が存在するというのを忘れて、それで宇宙というのは物質がすべてだと思ひ込む。

科学的世界観時代のドグマとして、自分とは肉体であると思ひ込むに至る。しかし自分は肉体であるってどういうことなんだろうか。それは極言して、自分とは脳である。現代人は九割がたそれを疑ってませんね。「私」という言葉で精神、感情、心とかいったことも含めるんでしょうけど、精神的なものを脳という物質だと思ひ込んで、脳波を測定したりとかトンチンカンなことをやっています。だけれども、はたして「私」というものは脳なんだろうか。「あなたりまえのことばかり」p114) と言っている。実際そうだと思う。現代人の多くは「要するに自己とは脳である。ゆえに脳死は自己全体の死」として、心のような非物質の存在を無視し、全てを、目に見え計測される物質活動の領域だけで理解しようとする。非物質の心さえも物質活動から派生したものであるいは属性と見る。こうしたドグマに現代人は知らず知らず陥っているのではないか。

ただ、このような現代人の「科学的」世界観に対する有効な宗教的世界観が出せないところに、現代人の宗教離れの大きな要因があると思う。こういう「科学的な」世界観に染まっている人に、真宗人が唐突に「浄土のいのちに帰る」とか「浄土のいのちに生きる」などといったも、それは逆に単なる独断、ないしはポエム(詩)の言葉としか受け取られない。真宗人がそう言うにしても、もっと厳密に論理を尽くさなければならぬであろう。(了)

を聞かせ、この本願の名号を信受しなければ、私は仏には成らないと誓われたのは、必ずこの名号を聞かせて衆生の心に届かせずにはおけない、きつと必ず衆生はこの名号を聞いて信受して助かると信じ切っておられるお心だと感じられます」

D 「そうなんです。本願の名号で必ず助けられる、聞けば必ず信じて助かると確信をもつて私どもに名号をおすすめくださっているのではありません。この世で助からねば次の世で、次の世で助からなければ更に次の世で、いつかは必ず一切の迷える衆生に名号を聞かせ、至り届けて助けようとの大信海のお心ですね」

*

るぞ、必ず助けるぞ」と名声、いわば言葉となり、名のられて、私どもに知らせたもうのが南無阿弥陀仏の名号です。ですから名号は阿弥陀仏の慈悲が私どもに現れたもう姿であり形なのです。あまりいいたとえでないかもしれませんが、母親が赤ちゃんを産むと、(かわいい、かわいい)という母親の愛情(仏心)が乳(名号)となつて流れ出て、それを赤ちゃんが飲んで大きくなるとつたものの如くですね」

A 「でしたら、南無阿弥陀仏の名号を聞くということは阿弥陀仏の大悲のお心に触れることになるのですね」

D 「そうなのです。南無阿弥陀仏を称え聞いていることは、(お前を救う)という仏の撰取の大悲を聞かせていただいていること、聞いていることなのです。すぐには分からなくても」

A 「衆生に名号を聞かせるのは、弥陀の大悲を聞かせてくださること、それによって、大悲が私たちに届いてくださるのですね」

D 「ですから南無阿弥陀仏の南無というのは(よりかかれ、よりたのめ)という仰せであり、阿弥陀仏は(撰取して捨てない功德)ですから、南無阿弥陀仏は(我をタノメ、必ず救う)という阿弥陀仏のお心なのだ、先達もいわれています」

*

A 「南無阿弥陀仏の名号を聞くというのは実際の生活ではどのようなになりますか」

D 「それはお念仏を申す生活です。お念仏を申せば、(ナムアミダブツ)と自分の耳に聞こえてきます。その一声一声が(汝を助ける、引き受ける)という大悲のお心であり、お喚び声であります。ですから名号をここでは名声と示されています。名となり声となつてくださる阿弥陀様です。声とまになつてくださるねば愚かな凡夫には(助けたもう阿弥陀仏が私たちとともになります)ということがなかなか分からないのです」

A 「そうするとお念仏を申す生活において名号が聞かれ、名号の大悲が知らされてくるのですね」

D 「そうなのです。しかるになかなか私たちはお念仏を申しませんから、阿弥陀様のお心が通らず、阿弥陀様のお心を痛めているのです」(了)

A 「名号を聞くということが本願を信すること、それはすなわち仏心をたまわることだといわれる、そこをもう少し具体的に話下さい。」

D 「一切衆生を仏にしたい、助けたいという限りなき大悲の仏心、それが形をとつて衆生に現れてきたお姿が南無阿弥陀仏の名号です。かたちなき大悲の心だけでは衆生には知りようがありません。衆生に(汝を助ける仏がここに居



zebu

信心夜話

伊勢の一婦人、自身の胸の始末にかかつて、ちよつとも仰せを受け付けずに苦しんでいられた。この婦人に向うて、おそのさんが、

「わたしがきつと安心できる秘伝を授けるで、二三年やる気はないか」

と云うと、婦人は非常に喜んで、「安心さえ出来ることなら如何なることでも致します」。するとおそのさんは、

「お差し支えなし御注文なしと云うことを、二三年云いづめにせよ」

と云えば、婦人は喜んで帰り、二三日たつとまたやつて来て云うには、

「仰せに順うて三日間朝から晩まで云いづめに致しましたが、なんともござりませぬ、胸の中は相変わらずおかしなものでござります。が、こんな心でもようござりますか」おそのさん曰く、

「お差し支えなし、御注文なし」

「それでもなんともござりませぬ、へんてつもない心中でござります」と云うと、おそのさんまた、

「お差し支えなし御注文なし」

婦人はここにおいて凡夫そのままのお救いに、初めて気がついて喜び勇まれました。

『信者めぐり』より

*

妙好人お園さんのこの話は有名である。ここでお園さんが「お差し支えなし、ご注文なし」を毎日繰り返せという方法を「きつと安心できる秘伝」として自信をもって勧められるが、お園さんは、この言葉に仏心大悲が良く現れていることを強く感じておられたのである。しかもお園さんが某婦人に「二・三年云いづめにせよ」と具体的に言っているところが、興味深い。これはお園さんが真面目にそうだったのであつて、単に励ます程度の言葉ではないと思う。こんなところにまたお園さん自身が、信心をいただくことにならざる真剣に取りくんてこられたことがうかがわれる。

それにしてもこの言葉を聞いて、某婦人が三日目で「凡夫そのままのお救い」に気がついたというのは、よほどこのお園さんのご法縁が時を得たお勧めであつたのであろうか。あるいはこのご婦人は今まで信心をいただこうと真剣に励み、しかも長年「自身の胸の始末にかかつて、ちよつとも仰せを受け付けずに苦しんで」こられたからであらうか。

*

阿弥陀仏のお徳の中、聖人はことに

無碍光の徳を中心にしただかれ、阿弥陀仏のことを尽十方無碍光如来と尊崇された。その無碍の徳とは「衆生一切の悪業煩惱にさわりなくたすけたまう仏徳」であるが、その無碍の心を「お差し支えなし、ご注文なし」と日常語によつてお園同行は味わわれていたのであろう。この平易な言葉で仏心大悲

を受け取った最初がお園さんだったかどうかは分からないが、お園さんにとつて南無阿弥陀仏が日頃どう響いてきたかをこの言葉は雄弁にものがたっている。

もともと阿弥陀仏の無碍光の徳は、弥陀の第十八願に「乃至十念・若生者・不取正覚」と表され、それを善導大師は「もし我、成仏せんに 十方の衆生、我が名号を称すること、下十声に至るまでせんに もし生まれずば正覚を取らじ」と明示された。これによつて明らかにされた阿弥陀仏の絶対無碍の大悲は法然聖人の魂をうち、やがて親鸞聖人に伝えられて、「親鸞におきてはただ念仏して弥陀に助けられまいらすべし」との法然聖人の仰せに信順して念仏申すばかりであるという聖人の信仰告白ともなった。

「称えるばかりでなにもいらぬ、そのままなりを救う」という弥陀の本願の心は、民衆の心に流れていき、お園さんのいわれる「お差し支えなし、ご注文なし」という言葉ともなつて表現されたのであろう。

*

某婦人が

この言葉を
お園さんか
ら勧められ
て三日間、
一日中繰り返して言つてみたが、

自分の心に変化がない。それで困つて再度お園さんに尋ねる。するとお園さんはあい変わらず「お差し支えなし、ご注文なし」といい、さらに婦人が「そうあなたに言われてもなんともない心中です」と返すと、同じくお園さんは「お差し支えなし、ご注文なし」とだけ言う。その時はつと弥陀の大悲に気がつき、同時にこの婦人は、今まで自分の心の変わることばかりにとらわれ、聞法し念仏すれば自分の心がどうかなり、どうかなればお助けと、知らず知らずそこにこだわつて、阿弥陀様の絶対無碍の慈悲をまったく無視していたこと、まったく聞いていなかったことに気づいたのであろうし、また大いに慚愧したのであろう。

「我が名を称えよ」との阿弥陀仏の仰せにすでにこの無碍光の大悲が全面的に示されている。それは「どうすることもできぬ、どう変わりのない、そんなお前の心だから、そのまま汝の心に注文なく、汝の心のままで助けるになんら差し支えはないぞ」の思し召しである。ただもう全面

念佛寺報恩講

十二月二十二日(土) 午後二時始まり

法話・念佛寺住職

的に「弥陀に助けられるばかり」なの
である。

(了)

平成20年度御年忌年回表

1周忌	平成19年亡
3回忌	平成18年亡
7回忌	平成14年亡
13回忌	平成8年亡
17回忌	平成4年亡
23回忌	昭和61年亡
27回忌	昭和57年亡
33回忌	昭和51年亡
50回忌	昭和34年亡

(23回忌と27回忌をせずに25回忌にする
数え方もあります。また50回忌以後は50年
ごとになります)